

医家随想

通巻600号特集

医家芸術と私

医師としての喜びと

悲しみ/他



四〇年ぶりの絵筆

鈴木啓之

高校生のころは絵を描くのが好きだったが、医学生、医局時代は忙しい日々を過ごし、絵筆を持つ気も起らぬまま歳月がながれた。六〇歳が近づいたころ勤務先病院の管理職に就くと、診療にくわえて病床充足率、診療報酬、医療過誤の予防など慣れない仕事が増えた。しかし、思つようにことは運はないのでストレスがつつのる。そんなある日、百貨店のギャラリーで旧知の画家E氏に会うと「こんど絵画教室をひらきます。参加されませんか」と誘いをつけた。自分で不思議なくらいその場で即決し入会した。

たまるストレスを少しでも和らげたい思いがつよく、絵を描くという非日常の時間を求めたのである。

はじめて絵画教室に行った日は、嬉しくもあり不安でもあり小学生のようであった。その日のモチーフは「一匹の目刺しである。まっ白な画用紙に鉛筆でおそろおそろはじめの一本、線を引いた。形がとれたら彩色をする。四〇年ぶりに手にした絵筆である。ところがヴィヴィッドにふるえる新鮮な経験であつた。

絵を描きはじめて面白経験をした。自分の描く作品のイメージは高校生のころの絵である。たぶんあんな調子の絵になるだろうと思ひながら筆をすすめるが、どうしてもその頃の絵にはならない。むかしにくらべて絵が全体におとなしい。

体力気力は一〇代のころと著しく違つし、この四〇年間の年輪も大きく影響を与えているのである。年齢とともに絵が変わるのは必然であるらしい。これから自分の絵がどう変わっていくのか楽しみでもある。

数年して、医家芸術クラブ主催の美術展があるのを知って入会し、その年から出品させていただいた。4年前にはじめて出品したときは、会場に展示されている自分の絵を見るのが気恥すかしくサツと素通りした。会場を訪れたひとに、絵の前で何秒間か立ち止まってもらつたが大変なことなも分かつた。

忘れられないのは、「医家芸術」平成十九年十一月号（文芸特集）の表紙絵に、その年出品した「冬の陽」と題した絵を採用していただいたことである。京都嵯峨野の落柿舎の土壁に冬の薄日が射している一枚である。手元に届いた「医家芸術」の表紙を見て嬉しかった。表紙の枠にしつかり納まつた絵は、自分の作品で

はないような気がした。

今年の6月、はじめて医家芸術クラブの総会に出席し美術部長の白矢先生にお目にかかった。「医家芸術」に載る先生の美術展印象記は楽しい。すべての出品作を愛情のこもったまなざしで丁寧に見ておられる。総会の報告では、どの部も活発に活動しているが、一方それぞれ運営上の難問をかかえているようである。これまででは先輩方の苦勞も知らずに出品させていたが、これから医家芸術クラブの発展に、そして白矢美術部長のもとで美術部の活動に微力ながらも尽くさなければと思ふ。

四〇年ぶりに絵筆をとってから早や十数年が経つ。我が家の一角を占拠して作ったアトリエコーナーで絵筆を走らせるのは至福のひとときである。最近四号の小品だが自分なりに気に入った作品が描けたのがうれしく、ひとりひそかに悦に入っている。サアお楽しみはこれからだ！

医家芸術に寄せて

高木 實

日本医家芸術美術展に初参加したのは昭和五十六年、第二十九回展である。爾来、ほぼ三十年にわたって医家芸術クラブにはお世話になってきた。私自身の記録を調べてみると三年ほど記録が残っていない年があるが、殆ど毎回出品をさせて戴いている。有難いことである。

小学校では低学年はクレヨンやクレパスで絵を習い始める。高学年になると水彩画になる。しかし、先生が、一人一人を指導するのではなく、描き上がった児童の絵は、教師の裁定、或いは好みもあるだろうが、良い絵はこれと教室の後ろに張り出される。そんな調子であった。中学に入ると、間もなく大東亜戦争が始まり、次第に戦時色濃厚となつて行くなかで、中学校の教育は学問をする場ではなく、国家の干城、つまり軍人育成の予

備校に変わつていった。中学入学時には、200余名の同級生も、軍人を志願して次々に学念から去つて行き、私がその学校を卒業した昭和20年3月の卒業生は入学時の半数以下に減つていた。中学生時代、学校で絵を描いた記憶はなく、戦前戦中、絵を描く楽しみを知らぬまま育つた。

戦後、人々は自由を取り戻し、絵画はもとより、音楽、その他の芸術に触れる機会も多くなつた。私は外地に育ち、そのせいとはかりは言えないが、繊細な感覚にやや欠ける気味があるようで、芸術にはかなりの隔たりのある人間であると言つ自覚があつた。

松本での修学は医学のみでなく、文芸、演劇、音楽など、色々な芸術文化に眼を開く機会を与えてくれた。松本は冬は寒いが、春、夏、秋、空気が澄んで快適な町である。

有名な文化人、小説家、評論家、演劇、音楽など、当時としては招聘するのに事

欠かぬ頗る良い町であった。講演会、音楽会、演劇などが催される事が多く、文化の香り高い松本の町での8年間で、私は多くの宝ものに恵まれたと思つてゐる。

医師になつて、勤務医として歩むことになつた私は、以後、東京に住むことになり、長年、産婦人科で仕事をして来た。今の時代は、勤務が激しい爲に新しく医師になる者には、産婦人科は嫌われる科になつてしまつたが、勤務が忙しく、仕事以外に何も出来ない日々を過ごして来た。

漸く絵を描いてみようと思つた年は、年齢五十歳になつていた。長い雌伏の年月であつたし、絵が描ける現在は至福の時間と言つても良い位である。

以前から私は趣味を持たない、無味乾燥な人間と見られていたらしい。生来無口で通つてきた私、自分のことを殊更自慢することは嫌いである。

『きみは何が楽しく生きてゐるのか

ネ。趣味とかは無いのかネ。』面と向かつて、そう言つ無礼名言を吐いた人物もいた。礼節を弁えない大人が罷り通る世の中、嘆かわしい。

私は絵を描くようになつて、物事の表面を写し取るだけでなく、誰もがつい見過こしてしまつものを見つけて、描ければ良いと思つようになつた。

風景画にしても、絵が風景を語るだけでなく、作者と絵の中の風景との対話が漂つて来る。そのような作品が出来れば良いと思つた。

六百号の迷懷

医芸誌(仮名)

この度、私こと医芸誌は六百号を数える迄に至つた。慶賀に耐えないことだ。わが国が長寿世界一だからといつて真似をするのではないのだが、クラブ誌としては長寿の部類に入るであらう。

また、この長い歴史を誇る少誌には、

これまで実に多彩な才人や文人墨客やらが登場しては去つていった。

去る前に去つていたひともいたよつだが。

その歴史のなかで、何時の頃からであるうか、文芸部員でもないのに田中秀昭という會員が、臆面もなくへボだかチャボだか判らないような随想を投稿し始めたのである。

少誌としては笑止千万と言つて放つておくわけにもいかず、詮方なく社会福祉の精神から投稿してきた文を掲載したのが間違ひのもと、味を占めた氏は毎月のように何年にもわたつてくたらない文をわが編集部に送り続けたのである。

氏は元を糾すと当クラブの旧奇術部に所属していたらしい。故緒方友三郎先生の発案で始まつた全国医家奇術フェスタバルが、当時は毎年行われていたが、その頃の部員だつたそうである。何年もの間続いたこの会も旧奇術部共々いつか歴史の彼方に消えていった。

それ以後、氏は奇術から離れ、代わり
に随想という間違った領域に入り込んだ
のである。今にして思えば、氏も早々に
往時の奇術部と運命をともにして欲しか
った。

さすれば、何年もの間、少誌の編集子
が毎月のように悩まされることはなかつ
たに違いない。幸いにも、ここ数年来、パ
タツと氏からの投稿が途絶えている。ど
うかこのまま大それたことを再び始める
よつなことはしないで欲しい。

六百号という記念のページを刻むこ
とができ、私ごと「医家芸術誌は心からこ
のことを誇らしく思っているところなの
だから。」

(田中秀昭)

本命馬

星野達夫

病棟に通じるエレベーターはなかなか
来なかった。私は3時に病棟で指導医と
一緒に受け持ち患者の長男に会うことに

なっていた。壁の時計の針は3時15分前
をさしていた。

わたしは医学部を卒業したばかり、毎
日が不安と緊張の連続だったが若くて張
り切っていた。医者になって最初に担当
した患者がこの患者で66歳の男性、病名
は末期の肺がんだった。

彼には若い娘さんがいて、毎日のよう
に病院にやって来て父親の看病をしてい
た。知的で笑顔の明るい人で私は病室に
行くのが楽しみだった。同じ病棟に配属
された若い医者も皆彼女のファンになつ
た。我々は親しみを込めて彼女を「A子
ちゃん」と呼んでいた。時々着るエプロ
ン姿がまたなんともいえず素敵で、若い
医師は早速お昼の職員食堂で「今日のA
子ちゃん見た?」「エプロン姿だろ?」見
た見た「いいねー」とつわさをしあった。
同僚はみな私をつらやましがった。私
の指導医は「控えめでやさしい女性はい
いよ。君もあんな人を奥さんにもらった
らいいね。お兄さんも立派なひとのよう

だし」といった。A子ちゃんの長兄は一
流企業の社員でパリに駐在しているとの
ことだった。年輩の看護婦は、以前同じ
病棟に勤務したドクターで担当した患者
さんの娘さんと結婚したひとがいる、そ
の女性もA子ちゃんに感じが似ていて、
家柄が立派な素敵なお嬢さんだったとい
う話をしてくれた。

うーん、そういうことがあってもいい
な、そついつことになれば自分の周りで
まあ同じ病棟に配属されている若い医師
の中で、本命といえはこの私であろう。
若い頃はいろいろなことを考えるもので、
忙しい診療の合間に勝手に想像をたくま
しくしていた。

夏の暑さが続いたある日、患者が急変
した。血圧が下がってきたのである。今
にして思えば、悪液質と食欲低下を背景
に熱中症を併発し多臓器不全が起りか
けていたのである。私と指導医が呼ば
れ、更に何人かのドクターが加勢に駆け
つけた。病室の隅でA子ちゃんが泣いて

いた。しばらくして連絡を受けた家族が次々と到着した。来る人も来る人も立派な人たちで、家柄のよさを想像させた。

それから何日もかかったが患者は次第に回復し危機を乗り越えることができた。患者の状態が思つたより悪いので、指導医と私は長男に帰国してもらい病状の説明をすることにした。それがこれから予定されている面談だった。

ようやくやってきたエレベーターから病棟階で降りた私はまっすぐに病室に向かった。腕時計を見ると3時2分前だった。ネクタイにちよつと手をやってから私はドアをノックした。

病室の中にはA子ちゃん、ひとりの男性がいて私を迎えた。患者の長男である。想像していたよりも若い感じだが立派な紳士だった。

「お兄様ですか」と私は聞いた。返ってきたことは衝撃的だった。

「いいえ、主人ですの。兄は申し訳ありませんが30分ほど遅れます。」

私は一瞬軽いめまいを覚えた。しかし心の動揺を表情に表すまいと懸命に自分に言い聞かせた。不測の事態が起こつても泰然としていてこそ本物の名馬であると考えたからである。

開業医のエピソード

小川 昭子

毎年春になると行事が多い。大学の謝恩会から始まり、同窓会や女医会の総会、先輩方の叙勲、教室の記念祝賀会、退官教授の謝恩会等、予定表にべつたりと記入されていたが特に感銘深かったのは東邦大学創立六十周年の祝賀会だった。盛大な荘厳な会で、関係者の御努力がしのばれ、感謝の気持ちと、この大学を卒業したという幸せで、胸がいっぱいだった。

母校が六十周年を迎えたという事に、日目の流れの早さにただただ驚きの目を見はると同時に、卒業して三十五年もと

思うと青春時代がしのばれ、なつかさで胸が痛くなる思いがする。過日、藤田先生にお目にかかった時、次号で「鶴風」が最後であると伺い、かつて編集させて頂いた関係で、これも誠に淋しい事だと切実に感じ、ペンを執らせて頂いた。

さて私は、二十五年に卒業してから数年小児科の臨床を学ぶ傍ら、本郷のグルントで研究を続け学位を頂いた。ほぼ論文が出来上がった三十二年から、狛江の片田舎で土地の方たちの強い要望で姉と開業した。

思えば早や二十年近くになる。当時の幼児達が今自分の子供を連れて来院し、一族四代を診ている例も少なくない。その間つれい事、苦しい事、悲しい事等、色々な思いを経験したが、今回の鶴風の最終号という事で、面白い事、特に忘れられない事を記し、同窓の先生方に一緒に笑って頂きたいと思った。

開業した当日の日曜日、中年の男が窓越しに、「先生入れ歯を見て下さい」とい

つたので、母が「家は歯科はしてないんですよ」といったが、後で「先生がいれば診て下さい」の意味だったと、未だに笑い話になっている。また、私共の小さな医院は、患者の数だけ多く、「患者に殺される……」と時々愚痴をいつてしまつが、関東中央病院からお二人の先生にお手伝いに来て頂いていた。また、夏に姉一族が避暑に行く時は、私一人では患者を捌ききれないので、当時小児科専攻でいらした五島先生にもお願いし、二人で楽しく外来をした事も数回あり、なつかしく思い出される。

その中の一人の先生がとても辛辣な事をおっしゃる方だった。或る時、育児相談に来院した母親が「この子は牛乳の方が良いでしょうか、母乳の方が良いでしょうか」と聞いたところ、「この子は牛の子なら牛乳の方が良いでしょう」と返事をされ、その母親は目を白黒させたが、私は思わず吹き出してしまった。今も講義でその話をすると、流石に学生たちも

爆笑し、しばらく止まらなくなるが、なんと分かりやすい説明かと今更感服している。

また、田舎の患者が「僕胃が痛いから胃を取つた方が良いかね」といったところ、「あんた頭が痛いからといって頭を取つてしまつ人がありますか」とその先生がいわれたので、また、部屋中爆笑したが、過日、その先生も急逝してしまわれた（祈 冥福）。

或る日全額部創の男性が来院、ミツヘルで簡単な傷を止める程度はよくやっていたが、その創が針と糸ですべきだといふ事が私にも分かった。外科の義兄が不在だったため、思い切つて私がやる事にした。麻酔する手も小刻みにふるえながら、自分に「落ちていて落ちていて」と言いながら受針器で縫つたところ、麻酔の深さと、針の深さが食い違つていたらしく、「痛い痛い」とわめくので、「大の男のくせにがまんしなさい」と叱りながら泣きたいような吹き出したような気持ち

ちをやつところえて終わった。翌日義兄に「昭子さんとても上手に縫えていたよ」と褒めてもらい嬉しかったが、昨日の心境を話し、一同涙を流して笑つてしまつた。

最近の事、二歳の患児が感冒性消化不良で来院した。母親の訴えでは激しい水様便との事だったが、子供が「先生おしっこが前と後と二つ出ちゃつたの」と言つたので、あまりにも上手な表現に、薬局も、看護師も、また笑いが止まらなくなつてしまった。

頭脳と肉体と両方すりへらず開業医、日毎に複雑化する保険請求に、ともすれば愚痴をいつたり、うんざりしたりするが、ここに記した話（氷山の一角）のように楽しい事、面白い事がしばしば、朝になると今日ほどどんな一日になるだろうと思ひ、夜終わつて後片付けをする時事故もなく大勢の人に感謝され、喜ばれたといふ満足感で、また、明日へのファイトが湧いてくる、といつて毎日を過こし

ている。

昭和四十一年、五島先生の御推挙で、理事をやらせていただいたから、本当に多くの先輩の先生方に接することが出来た。やさしい方、頼もしい方、悲しいとき慰めて下さった方等、心温まる思い出も多く、回窓生って何とすばらしいのだらうとしみじみ思う。

鶴風会が終わっても「鶴風」がなくなっても、会員の心は昔と少しも変わる筈はない。同好会でもよし、何らかの形で今後も御一緒に楽しい時を持ちたいとつくづく思う。最後に藤田先生に、立派な「鶴風」の編集に最後まで全力投球して下さい、心から感謝の意をこの誌面を借りて表したいと思う。御母草様が「とき」の編集をしていらしたという素敵なお話を思い浮かべながら。

.....
東邦大学医学部同窓会誌「鶴風」四十七号（昭和六十年九月）に掲載した
ものから転載しました。

高橋有恒先生のこと

平野 春雄

「医家芸術と私の関係」は、はつきりしないが、高橋有恒先生が、或は東京都医師会で、学校医会や都医ニコースに關係が出来て以来のことかと思われる。

豊島区栗鴨の拙宅の近くに庭の広い邸宅で「医師、高橋有恒」の門札がかかっている家があった。医師と門札があるが、高橋先生は、医学博士である。某日、高橋先生が自著の小説を数冊持参して拙宅でお話を承り、またその後、東京都医師会の広報部に関係して後、「医家芸術」に入会となった様に思う。

都医では広報担当理事の神津康雄委員長のもとで、三越デパート七階を借り切つて、「健康祭り」等の全国的広報事業に参加したり、都医ニコースの編集委員長として従事した。

又渋谷区医師会の広瀬正義先生が一緒

で彼は実に筆まめで医師会及び学校關係の会報や本誌にもよく寄稿していた。学校医と謂えば、練馬区の沼口満津男先生は医家芸術の古株であり、学校医全国天会でお会いすることもあったが、先生は小生と同年のベテランである。

次に高橋有恒先生のことを述べておきたい。先生は豊島区医師会の医道審議委員長をつとめられたが、心臓を痛められ、車椅子で地蔵通りを散策の姿にお会いしたこともあるが、某日、早朝ご家族からの急報で小生が往診したが、すぐに亡くなられた。葬儀は自宅で挙行されたが会葬者は門前にあふれた。出棺の時に俄かに沛然たる雨が降り出した。

高橋先生は東北の温泉旅館の御曹司であるときご実家の客席を拝見させていた。『トンネルを抜けると雪だつた……』の川端康成の宿で「雪国」を書いた部屋を見せてもらった。駒子が通つた六畳位のこじんまりした部屋であった。

医家芸術に至るまで

榎本 貴夫

先日、地元のデパートに買い物にでかけ、少しがっかりする経験をした。催し物広間に幼稚園児の絵（恐らくは父母の顔であろう）が数多く展示されており、その中に3歳児の絵もあった。多少造作のアンバランスは仕方ないものとして、絵はしっかりと描かれて面白かった。が、少がっかりしたのである。

と一つのは今に至るまで、私の密かな自慢の一つに三歳の時に家族（恐らくはやはり母）の絵であったのである。しかしこれは何ら特別自慢すべきことではなかつた訳である。しかし絵に対する興味は失われず小学4年のとき働く人をテーマに描いたものが図上の選任教師（内藤先生）のおかげで都が区が定かではないが出品させられたことが有り、忘れかけていた心に再び灯がともった。

中学に入ると油彩の基本手技を授業で習ってきた高校生の兄が教えてくれた。以後、水彩絵具を厚く塗る習慣が身に付いた。高等学校では授業は水彩ではあったが油彩への思いは断ち切りがたく厚塗りをよしとしてきたが、絵画専門の教師（高島先生）の理解もあり束縛も受けずに楽しむことが出来た。



高校1年の時だったと思つが読売新聞社共催で上野の西洋美術館でルオーの企画展が催され、読売新聞購読者に招待券のサービスがあり応募したところ抽選に当たり、恐らくは生まれて初めて授業をサボり美術館を訪れた。その時の心を揺

さぶる衝撃は抑えようのないものであった。その時のイメージをノートに表紙に描いている（写真⑤）。

今、多少画題の幅は広まっていますが、基本的には今でもこの高1レベルを脱していない気もする。高校2年で母親が急逝したため自らは進路を医学に向け、以後しばらくは絵筆を絶った。

私が師事した脳神経外科学、故牧豊教授が定年を迎え退官した際に最終講義終了時の肖像画を描いて差し上げた。そんなことがきっかけになったどうかは定かでないが、牧名誉教授が筑波大学の画学生を家庭教師にして六十の手習いをはじめたのである。先生は何事につけ仕事が早いので程なく、いのはな美術展（千葉大学医学部の美術同好会）に出品を始めた。そしてその先生の紹介があつて私も入会させていただったのである。

回を重ねるうちに故大村光先生の御推挙があり日本医家芸術クラブに入会させて頂いたのでした。その年はボンベイ現

ムンバイ) 湾を出品し表紙にも採用していただいた思いがあります。以後、描法に共感を持てる大村先生、斎藤宗寿先生などに教えをいただき、また長尾先生にも理論をお聞きしながら今日にいたっているであります。

今後は更に先生方の教えを肝に銘じつつ白矢先生とともに、自らの表現を追求することによって本会の更なる発展を図らんと願っている次第であるのです。

1970年そして今へ

秋 葉 琢 磨

1970年(昭和45年)は私達にとって最も大変は時代であった。父のペニシリンショック死に始まった。悲壮そのものである。東京から宇都宮へそして千葉県八千代市へ。四面楚歌の反対の輪に居た昭和43年、新設団地では医療機関開業地の早期開業をTVを通して住民の要望を訴え県からも人を派遣して早く、早くと

急がした。そして開業に踏み切った。

開業の建設中から手術患者(子宮外妊娠)、分娩希望者がつめかけた。それぞれの前医に患者とともに行って一人で手術した。代金は0である。大変であったが命を救った。

大学医局時代に麻酔科標榜医を取得してあった。細胞専門医や認定産業医などあらゆる資格を取得して開業したことが敵や悪口(悪評)を消す基礎となり近隣の医師達の手術の手助けとなっていた。そして景気の良いときには遠くはフィンランド、ポリビヤ、フィリピン、ブラジル、ペルーなど外人の出稼ぎ女性が多く来院した。開業35年間は本当に忙しくよく働いた。八千代市役所産業医、千葉産業保健推進センター相談員(労働官)、各地域工場への講演、老人会での講演など昼休み時間を利用した。

毎日の外来診察、分娩、手術、近医との連携、麻酔科標榜医の資格で外科系の先生や歯科の先生達にも大変便利がられ

た。大切にもされた。今でも麻酔医は可なり不足している。もう一度分娩を取り扱っては如何かと進言されている。

過日近医のオンコールで分娩を取り扱ったが初産で3500gの男児で76歳の私は疲れを感じマッサージを依頼した。ともかく若い時は本当によく働いた。行動範囲も広がった。

趣味でもゴルフ、俳句は50年の年期がある。日本医家芸術クラブの会員でもある。俳句でクラブ会誌に投稿している。俳句への関わりは、そもそも「アララギ」の雑誌の創刊号から3号までは母方の祖父の実家で発刊された。(明治41年10月13日発行 ¥13銭)

今東京根岸にある『子規庵』は(入場料500円) 山武杉で東京大空襲後、藤檀堂の寄付材木で建立されたものであり故寒川鼠骨先生の『子規弟子最後の直下生』子規庵要記のページ40に詳細に記載されている。

今では俳句、書道、美術でお世話にな

っている。銀座に出かけることが多くなく
っているが楽しみでもある。

千葉県美術会会員、近代水墨会会員
である。

余命少ないとき

青 山 六 弥

去る二月一日、水泳仲間(二二二二)会
から新年会を兼ね90歳の誕生日祝をして
戴いた。車での送迎、豊では胡坐をかけ
ない小生のため、低い立派な椅子を用意
して下さり、胸に大きなリボンを付けら
れるなど、面映い気がした。「元気で長生
きの手本」などと言われ、汗顔の至り、
かくかく悪い所が多いと話しても、この
年で水泳可能だから大した事はないと思
われている。

実は二月はじめ頃から、夜間、両手(特
に左)の手指の痛みとシビレがあり、日
中は痛みがなくなるが、屈曲がよく出来
ず、衣類の着脱、皿洗い、瓶の蓋開け、

おしぼりなどつまく行かず、整形外科受
診「手根管症候群」と診断された。原因
は散歩に手押車を用い、多くは左手で把
手を掴み、舗装の悪い道をカタカタ音を
立てて歩いた事。脊椎が前屈位であるた
め手関節に負担が強くなり、手根管の
腱鞘を痛めたものと思われる。

幸い右手は中指を除き機能障害は軽く
車の運転は可能。当初プール行きは週一
回としたが、一ヶ月前から三回行けるよ
うになった。手指機能のためにはよいリ
ハビリになっているようだ。しかし今、
左中指が少し腫れ、薬指、小指と共に屈
伸不良が続いている。手術は外来で二十
分程で済むと言つが、予後は必ずしも良
好でないよう。ステロイド注射、レーザ
ー照射はあまり奏効せず、湿布がよいの
で続けている。

このほかに脊椎後湾症、左肩、右膝関節
炎、慢性胃炎、前立腺肥大、右耳難聴
等があり、歯肉炎などで食欲不振のため
体重が十年前より約8kg程少なく、45

kgを上下している。この状態であと何年
生きられるのか、平均余命表では4.3年と
ある。

浜までは着る海女の時雨かな 瓢水
海に入ればすぐ濡れるのだから、雨が
降って着る着るのは無駄ではないかと考
えるのは間違いだ。わが身をかばい着を
着るのはたしなみで床しく美しい。ここ
では浜は死を暗示するように思われる。

どうせ人間はいずれ死ぬ。よく生きる努
力など空しいではないかと考えるのは浅
はかである。タ力をくくってなすべき事
をしないのは怠慢である。最後の最後まで
で生きるために力を尽くすのが美しい
(外山滋比呂著「マイナスのプラス」よ
り)。海に入る海女達は厚着だ。体温低
下を防ぐためである(先日TVをみて)。

多田富雄博士は世界免疫学会会長をさ
れた碩学。二〇〇一年、脳梗塞で三日間
昏睡状態の後覚醒したが、重度の右片麻
痺、言語障害等が続きリハビリを受けた
が効果が少なく、車椅子の生活が続き、

六年後には手術不能までに大きくなった前立腺癌が発見され、リニアック放射線照射を三十五回受け、副作用で癌が腫脹尿閉となり、留置カテーテルをした。

一手に介護に専念された奥様（医師）が股関節の置換手術を受けるため二ヶ月入院。先生は実妹の経営されている特老ホームに入院された事もある（二〇〇八年、期間不詳）。この間、読売新聞夕刊に二年間エッセイを投稿された。左手指でキーボードを叩いての原稿で人の数倍も

こんにちは・ひこと

いま 今岡 信浩

安井先生よりご紹介をいただきました。よろしくお願い致します。職場におきましても加藤浦三先生に公私共にお世話になりました。ぜひ入会させていただければと存じます。

（美術・写真・洋楽・文芸）

時間がかかり、手も肩も痛くなり遂には左鎖骨骨折を起こした（一九年十月末）。立ち上がるのに左腕に強い力がかかるからだ。

先生は能に造詣が深く、多くの新作能を発表され、不自由な身で京都まで舞台の検分に出かけられたりもされた。二〇一〇年二月のあとがきには「死の足音を聞きながら書いた」とある。それから間もなく四月二十一日ご逝去。享年七十六歳。

人は重病に襲われると多くは落胆し、闘病の意欲を失う。経過がよくとも創作活動をする人は極めて稀である。壮絶な先生の生き様には鬼気迫るものがあり感服に堪えない。先生の著書「落葉集話」とばのかたみ」には高齢者の医療問題、食の賞味期限、若き研究者へのメッセージなど多彩、「一読を。」

一方、わが身を省み、小事に拘泥しすぎる自分が恥ずかしいと思つた。

不安で 不安で

楠 登

私は学生の頃、六十年程前、町の画塾で絵を描いていました。夜になると悪友達と一緒に似顔絵かきで稼いでいました。たしか、新橋？ あたりでしたが、目の前の山手線の暗闇を、物悲しい警笛を残して電車は消えて行きました。繁華街の裏は裸電球の街燈が一本立つていました。そこで立小便をしていました。

今で言う高校生くらいだつたでしょうが、仲間は分け前を貰つて童謡を歌いながらスキップで去つて行きました。それ以来、会っていません。

彼は妙に印象に残る奴でした。「不安で不安でしょうがない。不安で不安でしょうがない」とよく言っていました。不安で不安でしょうがない、それが彼の口癖でした。不安で不安でしょうがない、何が不安なのかよく分かりませんでした。

おそらく彼自身もよく説明出来なかったのかも知れませんが。

私は医学生でした。故郷には親父もいました。仕送りをして貰っていました。しかし少々足りませんでした(親父には申し訳ない)。私も最近齢をとって墓地を買いました。そろそろ終の栖ではないが女房と一緒に穴蔵くらいは用意しなければならぬ歳になりました。兄貴がいるから御先祖様の墓には入れない。お前はな適当にやっつけ」と言っただけでか知りませんが、私としては「勝手にシヤガレ」とかなんとか、威張ってみせる他ないのです。

そついうわけで、とにかく御先祖様がいるのです。立派な墓でもあるだけで安心です(御先祖様に対して何て事を、この罰当たり目か)。

ポット出の馬の骨でもあるまいかと散々お説教を……いやいや勝手な執を吹いていられるのも御先祖様のお陰だとしてくしくしく思います。その医学生時代、

アプレゲールとか封建的何とかかんとかいろいろハヤリました。そして首尾よく家族制度は崩壊してしまいました。御同慶の至りです。

あの不安で不安でしようがないと言った彼もどつているのでしようか。無事に就職出来たでしようか。結婚したでしようか。子供は何人位いるのでしようか。安定した老後で奥さんと二人で教育問題とか介護問題とか、あるいは子供達の将来の事等いろいろ語り合っているのでしょうか。あるいはまた、ピカソの貧しい食事など見ながら人生を語っているのでしょうか。

デイスポーターザブル・ドク

ターは捨てられたか

隅坂修身

医療の現場でデイスポーターザブル(Dispo)

posabi)の製品は、再使用しないで使い捨

てることによつて、感染予防や洗浄、滅菌などの手間と経費を省くことが出来て、今では、無くてはならない物となっている。バブルの頃は、世間一般に使い捨てが蔓延し、故障した製品は修理するより、新品を買った方が安くて性能の良い物が手に入り、消費は美德と、あらゆる物が捨てられていた。ちょうどその頃の、厚生省(現在は厚生労働省)直轄の国立病院の医者に対しても、このような考えが浸透していたに違いない。国立病院の整形外科勤務医として、既に、8年間働いていた私は、大学の同門会誌(鳥整会誌第4号1988年発行)に、「デイスポーターザブルドクターと呼ばれないために」と題して書いている。その内容の一部を抜き出し、加筆してみた。

マイクロサージェリーは、長時間にわたつての顕微鏡手術を行うので、体力が要求され、目も酷使することにもなり、若い人に向く仕事と考える。病院の医者不足もそろそろなくなり、医学部を卒業

しても職はなしといつよつな時代も予想され始めたから、若い医者も溢れてくるとの風評を証明するように、医学部入学の募集定員数は減少を示していた。新人類に言わせると、我々の年齢の者を化石と呼ぶらしい。そのうち、墓碑、墓石、先祖様か？

この頃、Y病院の整形外科医は一人であつたが、年々忙しくなつて、外来、入院患者の診察、看護学校の講義、予定緊急手術と一人重役(十役)であつた。働けど、働けど、猶、我がくらは楽にならざり、じつ手(hand surger)を

ここにちは・ひとごと

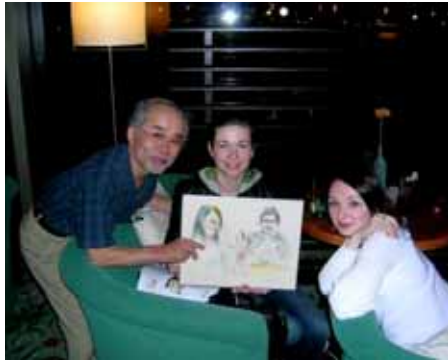
吉元勝彦

新参者ですが父と同様よろしく
お願い申し上げます。下手の横好きなので、立派な才能はないので
皆さまについていけるか心配です。

(美術・写真・洋楽・文芸)

診ると啄木をもじっている。

整形外科の入院証明や障害診断書等の書類は、書いても書いても、泉の様に湧いてくる。これら書類に、本年のベスト・ストレッサー賞を贈ろう。仕事に疲労困



ポーランド旅行中に出会ったロシア娘

憊していて、病院統廃合で余つた医者も助けに来てくれるまで体力が持つか、自信が無くなれば逃げ出すしかあるまい。スマートフォンを消し忘れられて駐車している、車の運命が思い浮かぶ。拒職症

で倒れば、それは、あなたの健康管理が悪いからですよと片付けられそうだし、せめて、医療秘書でもほしい。

企業では、重要なものの順位として、人物、金、情報、時間、チャンスと言われているが、国立病院では(厚生省と言つた方がいいかも知れないが)、人が軽視されているようにも思える。病院システムの硬直化は、職場環境の改善に積極的に働きかけようとする職員の意欲の低下、即ち、無気力、無関心、情緒的混乱(精神科領域では、学習された無力感と言つらしい)につながると思われると書いている。

今働いているのをライスボにしても、毎年、若い医者は誕生してくるではないか補充はできると、心配はいらないはずだったか?……社会実験が終わり、予測が見事に外れたことが明らかとなつてきた。今からでも遅くはない? いや、軌道修正しても、成果が出るのはすーっと先となるのが困りもの。

定年を9年残して12年前、手練手管で「手の外科」を口説いて、手に手を取ってY国立病院を駆け落ちした。フリーの整形外科医としてのスタートは、毒つき

デイスポ・ドクターの解毒滅菌再利用なので、人件費はタダ同然。クリニック開設に、億単位のお金を掛ける人の目には、初期投資は限りなくゼロに近い。嬉しいことは、例え、やめても借金が残らない安心感に、宮仕えと違い、人間らしく自分の時間が自由に出来ることであつた。

グラジアンと朝青龍

小川 再 治

人間的に未成熟で感情が不安定な朝青龍は、機嫌の良い時は人の良い温かさを示し、案外多くのファンに愛されていた。引退力士の断髪式では、ニコニコとその力士の肩を撫でていたの思い出す。米國で大分前にボクシングのチャンピオンになり、人々に愛されたロッキー・グラ

ジアンは、朝青龍から「温か味」も除いてしまった様な、腕力の強い不良少年だつた。しかし朝青龍の様に沈没することはなく、模範的な市民になつた。

両者の違いはどこにあつたのか。私は心理学でいう欲求不満の「昇華」の成功・失敗が大きな原因だつたと思つた。「昇華」とは悪を犯すエネルギーを、プラスの方向に発散することを指す。例えば暴力を振るうはスカツとする人が家をぶちこわしても、その家が撤去されるものであれば、彼は社会貢獻したことになる。

不良少年グラジアンは超人的腕力を使つて、弱い者をいじめて喜んでいたが、ある時ボクシングを憶えた。以来彼はその腕力をリングの中だけで使い、リングを降りたら優しい人になる努力を始め、見事に成功した。日常は非常に謙虚で優しいが、リングでは野獣と化し、相手を殴りとはず。相手はいい迷惑でノック・アウトされる。その結果ほめられるのだから、こたえられない程嬉しい。遂に彼

にフライドが生じて来て、穏やかな性格になり、社会の名士と謳われた。

グラジアンと少なからず似ている朝青龍は「腕力」と「優しさ」の使い分けが苦手だつた。彼は言つた、「僕は土俵に上がる時、相手を殺す気力でぶつかる。そうしなければ怪我をしてしまつ」と。たしかに格闘技には、この種の気力が必要である。しかし品格？ある横綱は相手に謙虚でなければならぬ。土俵で相手を倒したら、すぐ野獣性は捨て、紳士にもどり、時には相手を助け起こす優しさが欲しかった。

私は少年時代、双葉山が誤つて相手の足を傷つけた時、その力士がおんぶされていくのを、心配そうに見つめていたという話を聞いた。所が朝青龍は、倒した相手を土俵外に突き落としたり、大仰なガツポーズをしたりした。この様な場合、もう少し優しさを示したら、天敵だつた内館牧之さんに叱られることはなかつた。惜しまれてならない。